

令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号：32606
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2019～2021
 課題番号：19K00195
 研究課題名(和文) 活人画および活人画的なるものに関する総合的調査研究

研究課題名(英文) Research on Tableau Vivant

研究代表者

京谷 啓徳 (KYOTANI, YOSHINORI)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：70322063

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：活人画とは衣裳を身に着けた人物が静止した状態で絵画を再現するパフォーマンスを意味する。活人画、ないし活人画的なものを対象とする本研究は、活人画そのものの歴史記述に加え、活人画から美術および諸芸術に目を向けることによって新たに浮かび上がる諸問題について考察を広げようとするものである。具体的には、(1)活人画の実践と絵画制作の関係、(2)文学作品における活人画場面、(3)演劇・映画における活人画的表現、(4)活人画と裸体、(5)現代における活人画の展開、といった新たな視点から、美術史ないし芸術史において活人画が有した意義についての総合的理解を目指した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

活人画研究は従来、美術史学に限らず様々な専門分野の研究者が、各自の関心に従い、特定時代のそれについて遂行してきたと見てよい。それを取り扱う各研究者の関心の所在によって、特定時代ごとの研究がなされてきており、活人画そのものの歴史を総体として詳述したものは極めて少なかった。このような状況に鑑み、報告者はまず、活人画の通史的な歴史記述を試みた。そしてその通史研究を基盤として、本研究は、活人画から美術ないし諸芸術に目を向けることによって新たに姿を現す諸問題を抽出し、それらの論点に考察を広げようとするところに意義があったと考える。

研究成果の概要(英文)：Tableau vivant signifies a representation of a scene, painting, sculpture, by a person or group posed silent and motionless. This study aims to reconsider the tableau vivant analyzing, in especially, (1)reciprocal influence between tableau vivant and art production, (2) tableau vivant scene in literature, (3)tableau vivant in theatre end movies, (4)tableau vivant and nudity, (5)tableau vivant today (in especially, under covid pandemic).

研究分野：西洋美術史

キーワード：活人画 タブロー・ヴィヴァン 裸体 秦豊吉 大衆演劇

1. 研究開始当初の背景

報告者は、イタリア・ルネサンス美術研究者として、ルネサンス期の宮廷美術を専門とし、君主の意向がいかに美術作品に反映されているかを研究してきたが、その中で美術同様のプロパガンダ装置として、宮廷祝祭およびそこで用いられた活人画についても研究するようになった。その後、宮廷美術研究、宮廷祝祭研究、スペクタクル研究、近代芸能史研究と研究の射程を広げる中で、活人画というものが、それらを結びつける結節点となる存在であることに気付いた。そしてこれまでの報告者による活人画研究において、その歴史的展開については一通りの道筋を確認することができた（ルネサンス期ヨーロッパから近代市民社会を経て明治期の日本に至る活人画の歴史を概観した著書『凱旋門と活人画の風俗史 儂きスペクタクルの力』を上梓した）。その結果、活人画の歴史から美術史・芸術史を逆照射することの意義を認識するに至った次第である。欧米では、1967年のK. G. Holmströmによる古典的な活人画研究以来、ルネサンスの活人画（P. Helas, 1999）、ゲテ時代の活人画（B. Jooss, 1999）、第2帝政期の活人画（B. Vouilloux, 2002）の実態に関する個別研究があるが、通史的な研究は、大きなものとしては、Julie Ramos (ed.), *Le tableau vivant ou l' image performee*, Paris 2014 くらいである。よって一人の研究者が活人画史全体を視野に入れたうえで行う研究というのは、国内外を問わず希少である。このような状況に鑑みるならば、本研究は独自の価値を有するものであると考えられた。

2. 研究の目的

活人画研究は一般的に、個々の研究者が、専門とする時代について手掛けてきた。対して本研究の目的は、特定の時代にとらわれることなく、広く美術史ないし芸術史における活人画の意義を明らかにすることである。ルネサンス美術史、宮廷祝祭史、スペクタクル史、近代芸能史といった複数の視点から、通史的に活人画を考察してきた報告者による、活人画と美術をはじめとする諸芸術との関係についての研究によって、重層的かつ時代を超えた活人画の意義が解明されることが期待できる。それは国内外を問わず、きわめて独自の価値を有するものであるとともに、様々な分野に益する成果を生み出すものになるだろう。またその研究は、データ・ベースの枠組みの構築も含め、今後、祝祭史、演劇史、映画史、文学史、音楽史など、様々な分野の研究者による共同研究の土台としての役割も果たすことになるものと思われる。

3. 研究の方法

本研究では活人画および活人画的なるものに関して、（1）活人画の実践と絵画制作の関係、（2）文学作品における活人画場面、（3）演劇・映画における活人画的表現、（4）活人画と裸体、（5）現代における活人画の展開、といった新たな視点から、美術史ないし芸術史において活人画が有した意義についての総合的理解を目指した。

活人画に関して、もっとも網羅的な視点から編集された近年の先行文献、Julie Ramos (ed.), *Le tableau vivant ou l' image performee*, Paris 2014 を主要な道しるべとし、様々な芸術ジャンルにおける活人画的なるものについて、テキストと記録写真双方における一次資料の収集と整理をおこない、活人画および活人画的なものに関する包括的なデータ・ベースの構築に向けた作業を実施した。

なお、研究期間に発生したコロナ禍により、海外、国内ともに出張を執り行うことが困難となり、演劇における活人画表現などについては映像作品によることにならざるをえなかったが、逆にコロナ禍中における活人画という、課題申請時には思いもよらなかった同時代的な視点を得ることもできたのが不幸中の幸いであった。

4. 研究成果

（1）活人画の実践と絵画制作の関係

活人画の実践が現実の絵画・彫刻制作にどのような影響を与えているかについて、ルネサンス美術を中心に考察した。ルネサンスの活人画において、ファン・エイク兄弟によるヘント祭壇画の大規模な活人画がヘント市民によって演じられた 1458 年 4 月 23 日のフィリップ善良公のヘント入市式のように、具体的な原作となる絵画が存在した事例は少ないのだが、原作のない活人画であっても、『貧者の聖書』や『人類救済の鑑』の挿絵や開閉式祭壇画など、宗教的なコンテクストにおける聖なるイメージの提示のあり方を援用しつつ、入市式の実態に即した工夫や図像プログラムにふさわしい演出がなされていたことが多かった。入市式の企画立案や図像プログラムの考案は、例えばフランドルであれば都市修辞家と呼ばれる人たちの集団によって行われたが、その実現を請け負ったのは幅広い職掌を担った美術家たちであった。日常的に教会の美術に携わっていた美術家たちと都市修辞家集団の対話の中で、宗教的コンテクストにおけるイメージ提示のあり方が援用されていたのは自然なことであるといえるだろう。

またルネサンス期の壁画等において、画中の建築物や絵画彫刻に、あたかもそれが生きているかのような趣向が凝らされているケースが散見される。それは例えば、画中の建築物に施された彫刻としての人物像が主要場面の出来ごとに反応を示していたり、あるいは本来無関係であるはずの複数の人物彫像がコミュニケーションをしているかのように描かれていたりする場合である。このような表現の事例を収集・分析し、それらがいかに祝祭や入市式等における活人画実践との関連があったのかについても考察した。

(2) 文学作品における活人画場面

文学作品において活人画が行われる場面の登場するものは多い。その他の事例を広く調査し、それらの作品において活人画のシーンが有している意味について考察した。活人画を扱う小説の代表的なものはゲーテ『親和力』(1809 年) とエミール・ゾラ『獲物の分け前』(1871 年) である。『親和力』では、自らの外面的な美しさの誇示のために活人画を利用したルチアーネに対して、オッティリーエにあっては、自分が演じる聖母との性格的、内面的な同一化が行われている。この二人の娘の性格の対比が、活人画への取り組みを通じて見事に表されているといえる。『獲物の分け前』にも同様の仕掛けが施されている。その他、谷崎潤一郎の『金色の死』や江戸川乱歩の『パノラマ島奇譚』等の近代日本の文学作品も含め、東西の事例を広く調査したが、文学作品に活人画が登場する場合、単に同時代の風俗として言及されているケースと、小説内における登場人物の立場等が上演される活人画と深く結び付いているケースのあることが明らかとなった。この論点について、収集した事例を分析することにより、文学作品やそれに取材した演劇や映画作品において活人画が果たした役割についての理解を深めることができた。

(3) 舞台芸術、映画における活人画的表現

活人画はそもそもパフォーマンスの一種であるといえるが、それが舞台や映画に用いられることがあった。演劇やオペラ、ミュージカルにおいて、登場人物が静止して活人画をなす、あるいは逆に舞台上の額縁に入った活人画が動き出す、あるいは額縁から登場人物が出てくるという表現について、各時代に関する事例を収集した上で、それがその時代の現実の絵画とどのような関連を持っていたかについて検討した。映画に関しては、パゾリーニ、ゴダール、デレク・ジャーマン、グリーンウェイらによる映画の活人画的シーンについて、それらを映画史的な文脈においてのみ考察するのではなく、活人画史、あるいは演劇における活人画の使用と比較することによって、その意義についての検討を進めた。

演劇やオペラ、ミュージカル等の舞台芸術における活人画的趣向に関しても、事例収集につとめた。コロナ禍のため、海外での現地調査は困難であったが、ビデオやDVD等の映像資料を収集し、その演出上の効果や、それがその時代の現実の絵画とどのような関連を持っていたかについて検討した。また日本の大衆演劇における活人画的な趣向についても、現地の劇場公演の視察やビデオ・DVDによる記録映像を用いて調査を行った。

(4) 活人画と裸体

活人画が歴史的に有してきた重要な機能の一つが裸体展示である。活人画が模倣する名画には裸体画が多く、それを演じる活人画は女性の裸体を展示するための口実としても機能していたのである。例えばデューラーも報告しているようなルネサンスの君主の入市式における裸体を含む活人画から、フランス第二帝政期の上流階級の夜会の活人画、20世紀に入ってからの興行におけるレビューの活人画、そして我が国では昭和22年、新宿帝都座の額縁ショーに至るまで、その事例は枚挙に暇がない。

額縁ショーの第1回公演では、日劇の踊り子がボッティチェリの《ヴィーナスの誕生》を演じた。泰西名画において女神はヌードで表されるから、それを演じる女性もおのずからヌードということになる。かくして額縁ショーは日本におけるヌード・ショーの嚆矢となった。額縁ショーでプロデューサー的な役割を演じた秦豊吉は、いつまでもこんなことをしては公職追放が解けないからと額縁ショーから手を引いた後、新たな活動の舞台となった帝劇で東宝ミュージカルスを手掛けた。そこにおいても、活人画の形式を利用して大勢の女性の裸を舞台に載せていた様子を調査により明らかにした。東宝ミュージカルスは越路吹雪や榎本健一らを主演として、昭和26～29年に前後7作が上演された。上演パンフレットを見てみると、越路吹雪の写真の横にヌードの踊り子の写真が掲載されていたりして驚かされるが、当時はストリップ劇場の踊り子が秦に請われて帝劇の舞台にも出演し、裸体を披露していたのだ。その口実の一つがやはり活人画で、役名として「繪の女」が散見される。東宝ミュージカルスは必ずしも評判が高かったわけではなく、舞台に登場する裸体には閉口する向きも多かったようだが、秦の方は自信満々で、芸術としての女性裸体を観客の高覧に供しているのだと自画自賛した。いずれにせよ秦の裸体への情熱は、明治に流行した活人画を昭和に延命させたという意味では意義があったといえる。

(5) 活人画の現代的展開

活人画の現代における展開についても調査を行った。その結果、活人画は予想以上に我々の身近なものとなっていることが明らかとなった。活人画的な写真がSNSを賑わせており、私たちが美術館に出かけると絵の前で絵と同じポーズの写真を撮ったりすることがある。コミックマーケットではコスプレイヤーたちが絵画の登場人物のコスプレをしている。あるいは美術館が活人画的イベントを企画することもある（例えば大塚国際美術館のアート・コスプレ）。このとき活人画という言葉は使われず、また活人画を意識していないことの多いものと思われるが、行っていることはほかならぬ活人画である。

そしてコロナ禍中の現在、ステイ・ホームの遊びとして、活人画は本来のあり方で蘇った。きっかけはアメリカのゲッティ美術館が、美術愛好家に美術作品を自ら再現した写真を投稿するように呼びかけたことであった。それに応じて世界中の人々が自ら絵画を演じた。一連の投稿は評判が高かったため写真集としても出版された（*Off the Walls*, Getty Publication 2020）。それらを眺めてみると、細部まで再現度の高いものもあれば、見立てのセンスが抜群のシンプルなものもある。そもそも活人画は18世紀に貴族の娯楽として誕生したわけだが、現代、その裾野がおおいに広がり、ステイ・ホームの家庭の娯楽として復活したかたちである。活人画というものは本来エフェメラルな遊びだが、現在ではそれを写真に収めて記録することが可能になったのも大きいだろう。デジカメやスマホで誰でも簡単に撮影ができ、パソコンで画像処理することも容易である。現代人が絵を演じる悦びに目覚めてみると、様々なデジタル機器によって、一気にレベルの高い活人画が実現されるに至ったといえるのだろう。

このように素人の活人画写真がネット上を賑わしているわけだが、プロのアーティストも活人画的手法を使用するケースがある。まさに活人画的な手法を自らの方法論として活動を繰り広げてきたアーティストに森村泰昌がいる。森村は美術作品の登場人物を自ら演じた活人画的な写真を撮影し、それを作品としてきた。2019年、森村はアーティゾン美術館で個展を行った（ジャムセッション石橋財団コレクション×森村泰昌 M式《海の幸》 森村泰昌 ワタシガタリの神話、2021.10.3-2022.1.10）。中心となるのは青木繁の名作《海の幸》の活人画的再現である。海辺で漁師たちが獲物を背負いつつ行列する様子を描いたこの作品を、まず森村は活人画写

真とし、またそこから派生した都合 10 点の活人画写真を円形の会場に展示した。そこでは青木の活動した明治以降の日本の歴史が語られていく。大正、昭和戦前、戦中、東京オリンピック、万博、バブル期、そしてコロナ禍中の現在と、各時代の世相、日本人のありさまを、《海の幸》に呼応する構図の中に、総勢 85 名の登場人物すべてを森村氏が演じた群像の活人画として表現する。活人画の歴史を遡ってみれば、19 世紀後半にはヨーロッパ各地で民族主義的な集会の余興として活人画が行われたが、そこではそれぞれの民族の歴史が、大規模な歴史画の活人画として上演された。この度の活人画は森村一人によるものであるが、森村流の日本民族の歴史が活人画として制作されたという意味では、19 世紀に行われた活人画のあり方に先祖返りを果たしているようにも見える。森村の芸術活動は、活人画というジャンルそのものの歴史をも再現しているようできわめて興味深いものといえるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 京谷啓徳	4. 巻 427
2. 論文標題 大衆演劇の世界	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京人	6. 最初と最後の頁 116-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 京谷啓徳	4. 巻 3
2. 論文標題 額縁ショーをご存知ですか？	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 イルミナ	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 京谷啓徳	4. 巻 20
2. 論文標題 バーチャル遠足＜大衆演劇を歩く＞始末記	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 文化資源学	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 京谷啓徳
2. 発表標題 大衆演劇を歩く
3. 学会等名 文化資源学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 京谷啓徳
2. 発表標題 大衆演劇の世界 役者・舞台・劇場
3. 学会等名 東北大学日本学国際共同大学院（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 京谷啓徳
2. 発表標題 自著を語る 『凱旋門と活人画の風俗史 儂きスペクタクルの力』について
3. 学会等名 地中海学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 京谷啓徳
2. 発表標題 秦豊吉とハダカ 日劇ショウより帝劇ミュージカルスまで
3. 学会等名 20世紀メディア研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 京谷啓徳
2. 発表標題 美術と仮設性 ハリボテ凱旋門と活人画をめぐって
3. 学会等名 学習院大学哲学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 京谷啓徳
2. 発表標題 楠弘葉こと、楠五郎こと、榎崎五良のこと：私はいかにして活動写真弁士・楠弘葉と出会ったか
3. 学会等名 ボン大学片岡プロジェクト研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 京谷啓徳
2. 発表標題 仮設のイメージについて考える
3. 学会等名 サントリー文化財団グローバル時代の総合的イメージ研究会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 京谷啓徳（共著）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 735
3. 書名 美学の事典	

1. 著者名 京谷啓徳（共著）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 美術出版社	5. 総ページ数 431
3. 書名 西洋美術史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------